

日本個性化教育学会会報
第25号

発行
平成27年9月26日
発行責任者
加藤 幸次

今号は、日本個性化教育学会全国大会－神戸について会員の皆様にご報告いたします。

本会は、過去30年近くにわたって、「個に応じた指導」「ティーム・ティーチング」「少人数指導」「総合的な学習の時間」など、教育方法・内容・評価の改善の研究を推進してきました。

今大会は、我々の進むべき道を再確認するとともに、今までの蓄積をもとに、より具体的、実践的に活発な議論を進めました。

＜第8回日本個性化教育学会全国大会－神戸＞

○テーマ 新しい時代に必要な資質・能力（コンピテンシー）を育む

－子どもの学習意欲を高める個性化教育－

○期 日 2015年8月8日（土）・9日（日）

○会 場 神戸国際大学

○日 程 1日目 8月8日（土）

9:30～ 9:45 開会行事

9:45～11:00 講演1

「新しい時代に必要な資質・能力（コンピテンシー）を育む」佐藤真（関西学院大学）

11:15～12:30 講演2

「子どもを民主的な主体として育てる」澤田稔（上智大学）

12:30～全国理事会

13:30～16:45 分科会・自由研究発表

分科会 A

「資質・能力を育む授業づくりの工夫Ⅰ」－すべての子どもができる・わかる授業づくり－
コーディネーター 佐野亮子（東京学芸大学）

実践報告 村田辰明・野村伸一（関西学院初等部）

篠原威史（朝倉市立立石小学校）

解説と理論検討 奈須正裕（上智大学）

分科会 B

「考える力を育む授業づくりの工夫Ⅰ」－思考ツールの活用－
コーディネーター 谷口育史（近大姫路大学）

実践報告 山本文子（関西大学初等部）

森元貴子（大阪市立住吉小学校）

分科会 C 自由研究発表

コーディネーター 高浦勝義（日本個性化教育学会副会長）
浅沼 茂（東京学芸大学）

研究発表 香田健治（大垣市立一ノ瀬小学校）

人見修一（神戸市立美野丘小学校）

田村恵美（お茶の水女子大学大学院）

17:00～17:30 会務総会

18:00～20:30 懇親会



2日目 8月9日(日)

9:00～12:00 分科会・自由研究発表

分科会 D

「資質・能力を育む授業づくりの工夫Ⅱ」

ー子どもをまなざし、子どもと共に成長する教師ー

コーディネーター 成田幸夫(岐阜聖徳学園大学)

実践報告 山崎 優(岐阜聖徳学園大学附属小学校)
河田康皓(岐阜聖徳学園大学附属中学校)
中久保光志(仙台市立広瀬小学校)
藤浦寿夫(朝倉市立甘木小学校)



分科会 E

「考える力を育む授業づくりの工夫Ⅱ」

ー幼稚園と小学校の事例をもとにー

コーディネーター 鈴木正敏(兵庫教育大学)

実践報告 岩崎純子(宝塚市立西山小学校)
坂本理恵(池田市立さくら幼稚園)

分科会 F 自由研究発表

コーディネーター 高浦勝義(日本個性化教育学会副会長)
浅沼 茂(東京学芸大学)

研究発表 中島勝義(白川町立黒川小学校)
浦郷 淳(佐賀大学文化教育学部附属小学校)
藤原靖浩(大阪市立大学)
小山貴博(元・早稲田大学大学院)



13:00～16:00 シンポジウム 「アクティブ・ラーニングを考える」

コーディネーター 佐藤 真(関西学院大学)

シンポジスト 奈須正裕(上智大学)
久野弘幸(名古屋大学)
成田幸夫(岐阜聖徳学園大学)
鈴木正敏(兵庫教育大学)

16:00～16:15 閉会行事

講演1 「新しい時代に必要な資質・能力(コンピテンシー)を育む」

関西学院大学 佐藤 真



学力調査の上位のところはよく問題が読める、秋田などは教科書を読んでいる、というお話から入られた。しかし、一般的には、学力向上を求めると不登校、引きこもりを増やし、自分を開放することの出来ない若者、社会になじめない若者など、閉じられた個の増加が懸念される。新しい時代に求められているのは、教養の高さ、魅力的な個、哲学であるとされた。

新しい時代に必要な資質・能力を育むためには、教育環境を変えることが必要である。それは、現在の教室の風景は、陸軍士官学校の形態であり、今まで変わることなく継承されてきた。一斉学習が当たり前だということを逆転する文化が必要である。教室の参加構造が当たり前と言う文化になっていかなければならないとされた。そのためには、議論を中心とした授業を進めていく必要があり、子どもと教師が一体となって学習を進めていくことが当たり前になっていかななくてはならない。

また、現在、言語活動の充実が言われているが、かえって思考パターンの画一化を招くということが心配である。アクティブ・ラーニングの導入は、一斉学習からの脱却であり、探究学習をしているかということが、アクティブ・ラーニングという方法にとって大事である。認知だけでなく、情動が必要であり、何のために学ぶのが大切になってくる。

最後にまとめとして、児童生徒個々人を理解し受容し、個々人の活躍の場を作り、認め、励ますことを

通して個々人の居場所がある教室、出番のある学習を研修を通して確立していかなければならないとされた。
(文責 埼玉 多田)

講演2 「子どもを民主的な主体として育てる」

上智大学 澤田 稔

これまでも、同和問題、学生運動、格差問題など、社会は不平等や差別が残っていた。それらを身近に感じながら、民主主義の「自由や平等や平和」を考えていく中で個性化教育と出会い、両者の根本は同じであると考えている。

なぜ、いま主体の育ちなのかと言えば、学校で主体の育ちをより一層重視することは、それ自体が価値あるなしの問題というよりも、先進諸国の社会的、とくに経済社会の変化に伴う必然と言える。さらに、民主的な主体の育ちとは、より公正な社会の実現に向けて、自由・平等という近代の普遍的価値がどの程度達成されているのかを批判的に検討しながら、そこで明らかになった課題を民主主義的に解決するという政治的実践に主体的に取り組むことができる資質・能力が育まれるということを意味する。

こうした民主主義的な主体を育てるには、どうしたらいいのか。まず、教員側の学ぶ姿勢の重要性が挙げられる。正義とは何か、民主主義とは何かということ、すなわち教師が一市民としての生き方を考えることである。そして、それらを教材研究に生かし、子どもたちと向き合う。具体的には、本物の自治活動を子どもたちに体験させる。また、具体的で政治的なトピックスに関する体験的・問題解決学習を行う。さらに、個を尊重して、人権を重視し、存在を肯定するような「承認」の空間づくりを行う。承認という視点によれば、点数さえよければいいという学力観ではなく、個人内評価という評価になってくる。内閣府の調査によれば、日本の青年の70%が将来に希望がないと答えている。諸外国が30%程度なのに比べて大きく離れている。今の日本には「承認」が必要である。一斉授業では適応できない子どもがいる。そういう子どもには、自由進度学習などの個別学習という違う学びなら、一人ひとりが承認を得て、生き生きと学ぶ姿を見られる。こうした一人ひとりを承認する教育こそが、個性化教育なのである。

(文責 東京 大野)



【分科会A】

資質・能力を育む授業づくりの工夫Ⅰ

ーすべての子どもができる・わかる授業づくりー

本分科会では、まず初めに関西学院初等部の村田辰明先生と野村真一先生によって授業のユニバーサルデザインの考え方の紹介があり、また国語科の授業が例示された。教材は平家物語の冒頭部であった。子供達が詩の構造を発見するまでのプロセス、そしてその構造を用いて自分自身を表現する様子が示された。

次に、福岡県朝倉市立立石小学校の篠原威史先生が自由進度学習の実践事例を発表された。同学校において「あまりのある割り算」の学習をどのように単元構成したのか説明があり、特に子どもの意欲の変容についての報告があった。その後二つの授業実践の共通点が検討され、また子供の個性に対する捉え方について議論が交わされた。

共通点については伝統的な一斉授業との比較により、教師が教え方を子供の学び方に合わせて工夫している点であることが明らかにされた。自由進度学習では、教師が準備した複数の学習コースあるいは学習課題の選択を子供自身に任せることによって行われる。一方で授業のユニバーサルデザインでは、一般的に授業への参加が困難とされる子供が授業の楽しさを感じることができることを基準として指導の工夫が行われている。

(文責 東京 竹村)



【分科会B】考える力を育む授業づくりの工夫Ⅰ－思考ツールの活用－

1 関西大学初等部が目指してきた思考力育成 入門期の実践

山本文子（関西大学初等部）

開校6年目の関西大学初等部では、「考えることを考える」学習の時間を設定。思考を「スキル」と捉え、思考の仕方を習得させることで、思考力の育成を目指す。これを「ミューズ学習」の基本的な考え方とする。

ミューズ学習に取り組む時間は年間12時間。低学年は図書の時間、中・高学年は総合の時間を使い、習得から活用までの体系的なカリキュラムを編成している。ミューズ学習では、6つの思考スキル（「比較する」「分類する」「関連づける」「多面的にみる」「構造化する」「評価する」）を習得するために、「シンキングツール」と呼ばれる思考ツールが欠かせない。「シンキングツール」は、8種類のシンプルな図を使うことで自分の頭の中を整理するという感覚を実感させるとともに、友だちと自分の考えを相互に理解し合う伝達道具の一つとして有効に働く。

入門期では考えるおもしろさを十分感じさせることを重視し、活用期ではシンキングツールを使う価値や目的を認識させていく。



2 体験を確かな学びへ

森元貴子（大阪市立住吉小学校）

体験したことを基に確かな学びを実現するために、大阪市立住吉小学校では、①体験活動とりわけ直接体験を充実させる②表現することで考えを確かにする③他者と協同して課題を解決する、をポイントとし、子どもたち一人一人の考えを確かなものにするための表現活動のあり方に焦点を当てて取り組んでいる。

体験して得た気付きや疑問を基に、思考を広め深めることを可能にするのは表現活動に他ならない。そこで、思考の過程が他の人にも分かるようにするために、カードや図、表、マップやベン図、ウェビング図などの思考ツールを用いて「可視化」を図ることにした。個々に自分の考えを付せん書き、集団で思考ツールを用いて比較したり関連付けたりしながらまとめていくことにより、情報や考えを整理・分析することができるようになる。

どのような思考ツールを用いるのかによって思考の流れが変わってくる。子どもたちは思考ツールを用いて経験を重ねていくことによりどのように自らの考えを創り出していけばよいのかを学び、多面的なものの見方や考え方を身につけることができるようになっている。

（文責 関西 安倍）



【分科会D】

資質・能力を育む授業づくりの工夫Ⅱ －子どもをまなざし、子どもと共に成長する教師－

本分科会では、4人の先生方の実践報告をもとに、大会テーマ及び分科会テーマの観点から活発なそして熱心な討議がおこなわれました。

岐阜聖徳学園大学附属小学校の山崎優先生から、「一人一人の価値観を大切にする社会科学習のあり方」～第6学年社会科「新しい日本、平和な日本へ」の実践から～と題した実践報告を受けました。また同大学附属中学校の河田康皓先生から、「肯定的に異文化と出会う英語科のパッケージ学習づくり」と題した実践報告を受けました。フロアからは、「学習環境の豊かさが、学習者である児童・生徒に事象に興味を持たせたり、学習を楽しんだりすることにつながっている」という意見が出されました。

宮城県仙台市立広瀬小学校の中久保光志先生から、「子供が目を輝かせて探究し続ける総合的な学習の時間」～子供とともに歩み続けてきた5年間の振り返って～と題した実践報告を受けました。フロアからは、「教師が問題解決をする姿を見て子供が応援する单元から、子供が本気で問題解決をする单元に変容している姿が素晴らしい。」という意見が出されました。

福岡県朝倉市立甘木小学校の藤浦寿夫先生から、「学校生活において発話や身体表現が少ないA児が安心して他者とのかかわる自立活動」ーインリアル・アプローチの技法を段階的に取り入れた指導を通してーと題した実践報告を受けました。

コーディネーターである岐阜聖徳学園大学の成田幸夫先生から、インリアル・アプローチは、子どもの主体性を発揮させることであり、そのためには子ども理解の深さと支援が大切であるというお話がありました。

また、個性化教育が標榜してきた個に応じる視点として、自由度の高い学校・学級であること、コミュニケーション能力を高めること、能動的に活動する力を育てること、そして何よりこれらのことに対して教師自身がその資質・能力の向上を図ることが大切であるというお話で分科会を閉じました。

(文責 九州 池田)



【分科会E】考える力を育む授業づくりの工夫Ⅱー幼稚園と小学校の事例をもとにー

1. 子ども自らの「課題意識・問題意識」を育みながら考える力を培う 授業実践

～3年生・5年生の理科と算数を中心に～

岩崎純子（宝塚市立西山小学校）

子どもが「考える」学習とは、学習者の能動的な学習への参加である授業である。

子ども自らが「考える」学習は、学習者が「問題意識」をもって能動的に課題解決に取り組めることや、課題解決にあたってメタ認知的活動が行われる授業である。それらを第5学年算数科の「体積」と「角柱と円柱」において、子どものメタ認知的活動が活性化する授業になっているかを検証した。子どものノートにふきだしをつけ、課題についての感想や予想、解法の糸口等を記述させることで内的思考を文字化した。また自己チェックカードを書かせることで、学びの足跡・思考の変化が見えるノートになっていった。これらの記述内容を分析し、メタ認知尺度で数値化することで、子どもたちがどこの場面でどのような思考が働いているのかが、はっきりと見る事ができた。子どもが自ら課題を選ぶ・見つけることで「問題意識」が高まり、進んで課題解決を行うような授業構成が有効である。



2. さくらえいがかんへようこそ～「考える力」と「コミュニケーション」～

坂本理恵（池田市立さくら幼稚園）

子どもたちの主な遊びは、撮影ごっこ・お店ごっこ・郵便ごっこ・制作あそびであった。それらの遊びから映画館ごっこが生まれ、映画製作・売店・グッズ販売・広報のグループができた。グループでの活動をする前に、実際に写真館に足を運んだり、観光案内所のグッズ屋を見学したり、市の広報担当に直接話を聞きに行ったりした。子どもたちで運営について話し合ったり、グループ間で伝え合ったりすることで、自分たちの映画館を創造していった。活動の中で、様々なトラブルや問題が発生するが、それらに対処することで子どもたちは、自ら考える姿勢を身につけていった。遊びを組み立て（自己発揮）、振り返り（課題解決）、さらに改善して実践する（課題意識）PDCAサイクルを何度も繰り返すことで、考える力とコミュニケーション能力が育まれていった。認知的能力（言葉や数）だけでなく、非認知的能力（自立性・共感性・自尊性・粘り強さ・感情のコントロールなど）が培われていている。



(文責 大阪 西浦)

シンポジウム 「アクティブ・ラーニングを考える」

コーディネーター 佐藤 真（関西学院大学）

シンポジスト 奈須正裕（上智大学）

久野弘幸（名古屋大学）

成田幸夫（岐阜聖徳学園大学）

鈴木正敏（兵庫教育大学）



佐藤：「大学から始まった」「アクティブ・ティーチングからアクティブ・ラーニング（以下ALと略）と変わった」とテーマを説明した後、シンポジストを紹介し発言を始めた。

成田：個別化・個性化教育は単なる教育方法論ではなく、子ども観や学習指導観転換を伴う学校改革だった。しかし、方法論に止まってしまったという反省がある。子どもを信頼して選択させる多様な学びで個が生きる多面的な学校づくりを定着させないとALも方法論として矮小化するのではと危惧している。

久野：ALは小学校で実践されていることを、高校・大学で生かすもの。高校改革・大学改革の方策であり、学び方を学ぶのがAL。カザフスタンではケンブリッジ大学のプログラムで、教師中心の授業から探究的な学び、本質的な学びに転換している。世界的に見ても、このように広がっている。日本での自覚を促したい。

鈴木：幼児教育の立場からALを考えた。小学校への期待が大きい幼稚園では、協同的で探究的な活動が行われている。「ALは格闘技だ」「インプットがあるとアウトプットする」「自分で決める」「時が流れない」「思考が見える化」など、幼児教育とは思えないキーワードを使いながら事例を紹介した。

奈須：コンピテンシーが大事だと言ってもコンピテンシーそれ自体直接的に教えることはできない。コンテンツの指導を通して育む。「何を知っているか」から「どのような問題解決を成し遂げるか」である。現実の問題解決に資する学びとするには「オーセンティックな学習」と「明示的な指導」が大事である。

質疑：「ALを推進する課題は何か」「教科の本質を明示的にするとは何か」「若い人は『かたい』が大学ではどうか」という質問が出され、シンポジストから活発な意見が出された。

ALは、本学会が実践・推進してきた個別化・個性化の教育の流れの中にある。成果や課題も経験者として実践したり語ったりすることができるということを、改めて実感したシンポジウムだった。

（文責 東京 佐久間）



2016年 第9回日本個性化教育学会全国大会について

開催地：東京 会場：上智大学 開催日：2016年8月20日（土）～21日（日）

なお合わせて開催の免許更新講習（B選択講習）は、8月19日（金）～21日（日）、の計3日間です。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013

埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048-678-1681

e-mail sakuma.a@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会 第25号

平成27年9月26日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 多田 信夫